

# 十六世紀後半の南ドイツ及びオーストリアにおける 対抗宗教改革と《日本》認識

— 1580年代のパンフレットと説教における

《天正遣欧使節》についての言及を手がかりに —

蝶 野 立 彦

## (1) 「ヨーロッパでの宗教改革」と「非 ヨーロッパ地域でのカトリック宣教」 — その邂逅と衝突の痕跡を求めて

1517年のM・ルターによる『95箇条の提題』の公表とそれに端を発するヨーロッパ諸地域での「宗教改革及びプロテスタント宗教運動の拡大」、そしてポルトガルとスペインの両王家の支援のもとにローマ・カトリックの諸修道会の宣教師たちの手で進められた「アフリカ・アメリカ・アジアなどの非ヨーロッパ地域での大規模な宣教活動」、この二つの出来事は、十六世紀のヨーロッパ宗教史の展開を特徴づける画期的な歴史的事象である。だが、「ヨーロッパにおける宗教改革及びプロテスタント宗教運動の拡大」と「非ヨーロッパ地域でのカトリック諸修道会による宣教活動の拡大」という、この二つの同時並行的な事象の間にはいかなる歴史的因果関係ないし相関関係が存在していたのかを見定めることは容易ではない。確かに、歴史の概説書や教科書では、宗教改革によって引き起こされたヨーロッパでのローマ・カトリックの影響力の縮小が非ヨーロッパ世界でのカトリック宣教を促す要因となったことがしばしば示唆さ

れているが、「宗教改革の展開」と「非ヨーロッパ地域でのカトリックの宣教活動」との間の具体的な影響関係についての史料の根拠に基づく分析は、従来の研究では充分になされてこなかった。それでは、「ヨーロッパでの宗教改革をめぐる動き」と「非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教をめぐる動き」、この二つの巨大な歴史変動の間の具体的な接触・邂逅・衝突の痕跡をいかなる歴史的事実と史料のなかに探し求めることができるだろうか。

こうした観点から見たときに重要な意味を持つのは、《ヨーロッパにおける宗教改革の震源地》であったドイツ<sup>(1)</sup>に《非ヨーロッパ地域での宣教活動》に関する情報がどのように伝えられ、そこでどのように受容されたのか、という問題である。

十六世紀において非ヨーロッパ地域への宣教の拠点であったイベリア半島から遠く離れたドイツは、地理的に見て《非ヨーロッパ世界への窓口》から隔てられた地域であった。また、非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教に関する記録の多くは、ポルトガル語、スペイン語、イタリア語、ラテン語などの南欧諸語で記されていたから、ドイツ語圏の人々のうち、そうした記録を自ら読み解くこ

とができたのは、ごく一握りの限られた人々だけであった。さらに、1586年にイエズス会総長C・アクアヴィーヴァが、「インドでの宣教への従事」を希望するドイツのイエズス会士に対して、インドでの宣教活動と同じくらい困難なドイツでの任務に傾注するよう返答していることから窺えるように、十六世紀後半のドイツでは、カトリック諸修道会の活動の重点は「トリエント公会議決議に基づく教会改革（カトリック改革）」と「宗教改革の拡大に歯止めをかけ、カトリックの影響力を回復させるための対抗宗教改革的試み」に置かれており、非ヨーロッパ地域での宣教活動に従事するドイツ語圏出身者の数は、南欧出身者に比して遥かに少なかった<sup>(2)</sup>。

このように十六世紀のドイツは、地理的にも言語的にも、そして人的交流という観点から見ても、「非ヨーロッパ世界でのカトリック宣教」から隔てられた地域であった。しかし、そのことはかならずしも当時のドイツの人々が非ヨーロッパ世界の動向と無縁であったことを意味するわけではない。なぜならば、非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教活動に関する重要な記録は、ドイツでも、1560年代以降、ラテン語印刷物として、さらに1580年代以降になると、ドイツ語翻訳版という形態で、数多く刊行されたからである<sup>(3)</sup>。

そして「非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教」と「宗教改革」との《接点》という観点から見た場合に重要なのは、ドイツで印刷に付された「非ヨーロッパ世界でのカトリック宣教」に関する記述が、宗教改革の拡大に歯止めをかけ、ルター派信徒をカトリックに改宗させるための《対抗宗教改革的な情報宣伝の手段》としても用いられたこと、さらにそうした印刷物がカトリック信徒のみならずルター派信徒をも《受容層》として想定していたことである。1564年3月24日に教皇ピウ

ス4世がトリエント公会議決議に基づく小勅書として公にした『禁書目録と10規則』<sup>(4)</sup>に準拠しつつ、バイエルン公領を初めとするドイツ（神聖ローマ帝国）のカトリック領邦では、「非カトリック的な印刷物」を排除するための《検閲と書籍流通の取り締まり》のシステムが次第に確立してゆくが<sup>(5)</sup>、「非ヨーロッパ世界でのカトリック宣教」に関する諸々の記録もまた、そうした検閲システムを経由する過程で、カトリック神学者による加工とアレンジを施され、「ルター派の論駁」「カトリックの優越性の誇示」「ルター派信徒に対するカトリックへの改宗の促し」といった対抗宗教改革的な目的に適う印刷物に編集されていたのである。従って、「非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教に関する情報」が、このような検閲・編集のシステムを介して、十六世紀後半のドイツのカトリック神学者たちによってどのように加工され、「宗教改革（ルター派）との対決」というコンテクストのなかにどのように移し替えられていったかを分析することは、「ヨーロッパでの宗教改革をめぐる動き」と「非ヨーロッパ地域でのカトリック宣教をめぐる動き」の邂逅の痕跡の一端を浮かび上がらせることに繋がるだろう。

以上のような問題設定を踏まえつつ、本稿では、1586年に出版されたカトリック神学者の手になる3点のドイツ語パンフレットに記された「日本からの天正遣欧使節」に関する言及に光を当ててみたい。

## (2) 1580年代の対抗宗教改革的な印刷物に記された「天正遣欧使節」についての言及 — G・シェラーの3点のパンフレット

1584年～1586年の「日本からの天正遣欧使節の来欧」という出来事が当時のヨーロッパに与え

た衝撃の大きさは、ヨーロッパの諸地域で刊行された「日本からの使節」に関する印刷物の出版点数から窺える。A・ボスカロの書誌学的研究によれば、「日本からの使節」を主題とする印刷物が1585年の一年間だけで49点出版されており、1585年から1593年までの間に78点の「天正遣欧使節」を主題とする印刷物（所蔵が確認できないものも含めると1595年までの間に94点）がイタリア、フランス、ドイツ、ポーランド、ベルギー、スペイン、ポルトガル、チェコの諸都市で刊行されている<sup>(6)</sup>。だが、本稿で分析の対象とする3点のドイツ語パンフレットは、このボスカロの書誌学的リストには含まれていない。なぜならば、これらのパンフレットは、「日本からの使節」それ自体を主題にした印刷物ではないからである。それらは、「ルター派神学者の主張の論駁」と「ルター派住民に対するカトリックへの改宗の促し」を目的に刊行されたものであり、「日本からの使節」に関する言及は、全体の論述のごく一部分でなされているに過ぎない。しかしそれゆえに、これらの記述は、「日本からの使節の来欧」という出来事が「ドイツにおける対抗宗教改革の文脈」にどのように組み込まれていったかを知るための重要な手がかりとなるのである。

本稿で分析の対象に取りあげる3点のパンフレットは、いずれもオーストリア大公領の首都ウィーンのイエズス会神学校（Kolleg）の神学者G・シェーラー<sup>(7)</sup>によって著されたものであり、これらのパンフレットには以下の①～③のタイトルが付されている。

① 『ヴェルテンベルクの […] 神学者たちが […] 最近流布させた怒りに満ちた誹謗文書に対するゲオルク・シェーラーの穏やかなる返答』<sup>(8)</sup>  
[以下『穏やかなる返答』と略]

② 『[…] ルーカス・オジアンダーに対するイエ

ズス会士の潔白の保護』<sup>(9)</sup> [以下『潔白の保護』と略]

③ 『本年1586年の […] 四旬節と復活祭の期間に […] それまで26年の間そこに嵌り込んでいたルター派から再び […] カトリック信仰へと連れ戻された […] ニーダーエスターライヒ大公領内のオーバーハウセク及びニーダーハウセク貴族領の、その改宗の諸理由。イエズス会の神学者ゲオルク・シェーラーがグレステンの上記貴族領の小教区教会で六旬節の主日の福音について行った説教』<sup>(10)</sup> [以下『改宗の諸理由』と略]

これらのパンフレットのうちの①と②は、ヴェルテンベルク公領のルター派神学者たち（L・オジアンダー、J・アンドレーエなど）とオーストリア及び南ドイツのカトリック神学者たち（シェーラーやアウクスブルク司教座聖堂の説教師C・ローゼンブシュなど）との間で展開された《パンフレットによる論争》の過程で出版されたものであり、バイエルン公領の大学都市インゴルシュタットで刊行されている<sup>(11)</sup>。そして①のパンフレットでは、日本の3人のキリシタン大名のローマ教皇宛の書状の全文がドイツ語に翻訳されて引用され、それが《ルター派への論難の根拠》として用いられている。

①と②のパンフレットに比して、③のパンフレットの出版の経緯はやや複雑である。①②と同様に、③のパンフレットもまた、バイエルンのインゴルシュタットで出版されているが、そのタイトルからも見て取れるように、このパンフレットは、オーストリア大公領のニーダーエスターライヒ（下オーストリア）のハウセク貴族領でシェーラーが行った《説教》の内容を《印刷物》に編集したものである。ハプスブルク家の本拠地であったオーストリア大公領では、1576年にルドルフ2世が君主

に即位した後（彼は同年、神聖ローマ皇帝の地位にも就いた）、対抗宗教改革的な宗教政策が強化され、1580年代以降、領内のルター派信徒たちの多くが激しい《カトリックへの改宗の圧力》に曝されるようになった<sup>(12)</sup>。ハウセク貴族領でのシェーラーの説教は、同貴族領の領有権がルター派貴族からカトリック貴族に譲渡された後に、ハウセク貴族領の領民に向けて、「カトリックへの改宗」を要求するために行われたものである。そして「天正遣欧使節の来欧」という出来事は、「ハウセク領民がルター派からカトリックに改宗する」ための重要な「理由」の一つとして、説教の一部で取りあげられている。

この3点のパンフレットに記された「天正遣欧使節に関する記述」について、従来の研究では殆ど光が当てられることはなく、まとまった分析もなされてこなかった<sup>(13)</sup>。そこで本稿では、続く(3)でシェーラーのパンフレット作者としての活動とその背景について概観したうえで、(4)で、①と②のパンフレットの当該箇所、さらに(5)で、③の説教の当該箇所に、それぞれ分析を加え、「日本からの使節」に関する情報が、それらのパンフレット・説教のなかでどのようなアレンジと再解釈を施され、「ルター派との対決」の文脈にどのようにして移し替えられていったのかを、特に「ルター派の宗派（教派）形成」「バイエルンの検閲政策」「オーストリアの対抗宗教改革」との関連に重点を置きながら、検討してみたい。

### (3) シェーラーによるドイツ語パンフレットの出版の背景

——ローマ教皇庁の『禁書目録と10規則』（1564年）とバイエルンの書籍検閲制度

1540年頃にティロル伯領のシュヴァーツの比

較的貧しい家庭に生まれたシェーラーは、ウィーンのイエズス会神学校に学び、カトリック司祭に叙階された後、1577年から1600年までウィーンのハプスブルク家の宮廷の宮廷説教師を務めた。彼は、皇帝ルドルフ2世の弟のオーストリア大公エルンスト及びマクシミリアンの聴罪司祭を務める傍らで、ルドルフ2世の宮廷があったボヘミア王国のプラハや、オーストリア大公カール2世が統治するシュタイアーマルク公領のグラーツなどでも、宮廷での説教に従事した<sup>(14)</sup>。

このような「ハプスブルク家の宮廷説教師」としての側面とともに、ウィーンでのシェーラーの活動を特徴付けているのは、「大衆的・庶民的な説教師」としての側面である。1562年頃から開始されたシェーラーのウィーンでの説教は、その《雄弁さ》と彼の出自に由来すると思われる《庶民的な語り口》ゆえに大衆的な人気を博し、1571年頃には、彼の日曜礼拝の説教に多くの民衆が詰め掛けるようになっていた<sup>(15)</sup>。

1583年に始まるシェーラーの「ドイツ語パンフレット作者としての活動」は、こうした彼の「説教師としての活動」の延長線上に位置づけられるべきものである。十六世紀ドイツのルター派神学者たちがドイツ語圏の人々の日常言語（民衆語）であるドイツ語で多くの印刷物を刊行したのとは対照的に<sup>(16)</sup>、カトリックの印刷物は、ローマ・カトリック教会の公用語であったラテン語で執筆・刊行されることが多く、「ドイツ語での著述・出版活動」は、カトリックの著述家にとって《不得手なジャンル》であった<sup>(17)</sup>。そうしたなかであって、シェーラーは、「ドイツ語によるパンフレットの製作」を出版活動の中心に据えた、数少ないカトリック神学者の一人だった<sup>(18)</sup>。ウィーンの民衆を前にした説教で培われた「ドイツ語による説教の技術」がシェーラーを「ドイツ語によ

る印刷物の製作」へと向かわせたことが推測できる。

だが、「ドイツ語による出版」がシェーラーの出版活動の中心となったことは、彼の印刷物の多くがヴィーンではなくバイエルンのインゴルシュタットで刊行される要因ともなった<sup>(19)</sup>。1564年のローマ教皇庁の『禁書目録と10規則』の第6規則によって、「異端者との間の神学論争に関わるテーマについてラテン語ではなく民衆語で書籍を刊行する場合には、司教ないし審問官による検閲を課すこと」が義務づけられたが<sup>(20)</sup>、その結果として、カトリック神学者がドイツ語で《ルター派への論争書》を刊行する場合には、「カトリック教会の検閲基準に則った審査と認証」を経ることが条件となった。そしてシェーラー自身が『穏やかなる返答』の序文で述べているように、彼の印刷物の重要な販売先は、司教区図書館のようなカトリック教会の関連施設であった<sup>(21)</sup>。そうした施設に配架してもらうためには、「カトリックの検閲基準に則った認証」を得ることが必須であったが、ヴィーンの印刷・書籍販売業者には《プロテスタントへの共鳴者》が多く、十六世紀後半のオーストリアでは、カトリックの検閲基準に則った書籍審査制度も確立していなかった<sup>(22)</sup>。それとは対照的に、ドイツのカトリック諸領邦のうちで、最も早い時期に《対抗宗教改革政策に基づく書籍検閲のシステム》を確立したのがバイエルン公領であり、とりわけインゴルシュタットでは、1564年の『禁書目録』の公表に先立つ1555年に、インゴルシュタット大学通達を通じて、同地で出版されるすべての書籍に対して大学の神学部長が審査及び認可を行うことが定められていた<sup>(23)</sup>。1580年代後半のシェーラーのパンフレットの大半がインゴルシュタットで印刷に付された理由は、書籍検閲制度に関わるこうした状況に求めること

ができるであろう。

そして「天正遣欧使節」についての言及が記されたシェーラーの3点のパンフレットにはいずれも、その末尾にインゴルシュタット大学の総長代理のA・フンゲルス（フンガー）のラテン語の認証文と署名が印刷されている<sup>(24)</sup>。「日本からの使節」に関する情報が「ドイツの対抗宗教改革」の文脈に移し替えられてゆくプロセスは、こうした《シェーラーのパンフレット》と《バイエルンの検閲政策》との関わりからも垣間見えるのである。

#### (4) 『アウクスブルク信仰告白』に対する論難の根拠としての「日本の王と諸侯の書状」

—「ルター派とコンスタンティノーブル総主教の書状交換」に関するシェーラーの議論

「天正遣欧使節」についての言及が含まれたシェーラーの2点のパンフレット（『穏やかなる返答』と『潔白の保護』）は1580年代のヴュルテンベルク公領のルター派神学者との論争の過程で刊行されたものであり、その論争の重要な背景の一つを形作っていたのは、「ルター派と東方正教会との連携の可能性」についてヴュルテンベルクの神学者とコンスタンティノーブル総主教との間で交わされた書状のやり取りであった。

1573年に神聖ローマ皇帝マクシミリアン2世は、神聖ローマ帝国と休戦状態にあったオスマン帝国に、ケルンテン出身の貴族D・ウングナートを使節として派遣したが、この使節（彼はルター派信徒だった）に説教師として同伴したヴュルテンベルク公領のチュービンゲン大学の神学者S・ゲルラッハを仲介役にして、ヴュルテンベルクのルター派神学者と当時オスマン帝国の支配下にあっ



たコンスタンティノーブル総主教との間で書状のやり取りが始まった。チュービンゲン大学の M・クルジウスとアンドレーエは、《ドイツ語》及び《ラテン語》で記されているルター派の『アウクスブルク信仰告白 (Augsburger Konfession, Confessio Augustana)』をコンスタンティノーブルの正教会の公用語である《ギリシア語》に翻訳したうえで、それを 1574 年にコンスタンティノーブル総主教エレミアス 2 世に送付した。このギリシア語版『アウクスブルク信仰告白』を叩き台にして両者の間で書状がやり取りされ、ルター派と東方正教会との間の「神学的一致の可能性」が模索されたが、1581 年に総主教の側が「両者の不一致点」を明示し「書状交換の継続」を断ったため、書状のやり取りは途絶えた<sup>(25)</sup>。

この出来事に関する情報がローマ・カトリック側に伝わると、カトリック神学者たちは、ルター派を論難するための多くのパンフレットを刊行し、エレミアス 2 世の書状を引用しながら、「ルター派が、カトリック教会のみならず東方正教会からも拒絶され、切り離されてしまった」と喧伝した<sup>(26)</sup>。シェーラーも、この出来事に関するドイツ語パンフレット (『コンスタンティノーブルからの新たな知らせ』)<sup>(27)</sup> を 1583 年に出版し、それがきっかけとなって、ヴェルテンベルクのルター派神学者たちとシェーラーとの間でパンフレットによる議論の応酬が続いた。1586 年の『穏やかなる返答』は、こうした議論の過程で出版されたものであり、同書中の「日本からの使節」に関する言及も、「ルター派とコンスタンティノーブル総主教の連携の失敗」についての議論の一部に組み込まれている。

その箇所でシェーラーは、「汝ら [ヴェルテンベルクのルター派神学者たち] は [...] 陸路と海路を経巡って、一人の異国人 (Frembdling),

一人のギリシア人をルター派信徒 (Lutheraner) [...] にしようと試みたが [...] 汝らのすべての企みは水泡に帰した [...]。[...] それにもかかわらず汝らは [...], 汝らが送付した信仰告白への同意 (Beyfall) を幾人かのギリシア人から勝ち得ることができた、などと偽って [いる]」<sup>(28)</sup> と記したうえで、「それならば、我らカトリック信徒 (wir Catholischen) は [...] 次のことを真に誇りうる [...] だろう。即ち、我らのカトリック信仰が、東インドと西インドの (sowol in der Orientalischen als Occidentalischen India) 不信心かつ異教的かつ偶像崇拝的な諸民族から、毎年のように、いや毎日のように、大いなる同意を勝ち得ていることを。[...] 全世界が知っている (alle Welt weiß) 通り、本年 1585 年に<sup>(29)</sup> 初めて、日本 (Iaponia) から名望ある強大な王と諸侯 (großmächtige König vnd Fürsten) が、ローマ教会に対する彼らの服従と恭順 (Gehorsams vnd Vnderthenigkeit) の徴証として、ローマの教皇座に彼らの使節を遣わしたように」<sup>(30)</sup> と述べている。そしてさらにシェーラーは、「我らが名前を隠して [...] ごまかそうとしているなどと非難されることのないように、私は、その使節の名前だけでなく、王と諸侯の名前も、教皇グレゴリウス 13 世聖下宛の彼らの書状の写しと併せて、付記したいと思う。その使節の名前はマンキウス [伊東マンショ] とミハエル [千々石ミゲル] であり、彼らに付き従った他の 2 人の貴族出身の高位身分の者たちの名前はマルティヌス [原マルチノ] とユリアヌス [中浦ジュリアン] である」<sup>(31)</sup> と述べ、それに続く箇所で、日本の 3 人の大名 (豊後の王フランキスクス [大友宗麟], 有馬の王プロタジウス [有馬晴信], 大村の公爵バルトロメウス [大村純忠]) の教皇宛の書状のドイツ語翻訳文——ラテン語翻訳文からドイツ語に翻訳さ

れたもの——を6頁に亘って紹介している<sup>(32)</sup>。

このように、シェーラーの論述のなかで、「日本の王と諸侯のローマ・カトリック教会への使節派遣の成功」という出来事は、「ルター派とコンスタンティノーブル総主教との連携の失敗」と対比させられるかたちで、「非ヨーロッパ地域の諸民族のカトリックへの同意表明」と「ルター派に対するカトリックの優位」を象徴する出来事として取りあげられている。そして、シェーラーがこの「日本からの使節派遣」の重要な意義をどのような点に見出していたかは、日本の3人の大名の書状の写しの後に記された、次のような文章から明らかになる。そこでシェーラーは、「日本の3人の王と諸侯」がいずれも書状のなかで「教皇の御足に接吻し、自らの頭の上にその御足を戴く意志」を表明していること<sup>(33)</sup>を踏まえつつ、次のように記している。

「汝ら〔ルター派神学者たち〕〔…〕は、ドイツ（Deutschland）において教皇の頭の上に座し、汝らの臭い足（stinkende Füß）で彼を踏み付けようとするが、これらの強大な、そして今やキリスト教徒となった〔日本の〕王たちは、彼らの使節と書状とを介して、彼らが《大いなる神にして天地の王》の《代理人》として崇め敬うローマ司教の御足の下に（vnder die Füß）ひれ伏している。〔改行〕果たしてこれと同じような事柄を、汝らはギリシア（Griechenland）から提示することができるだろうか？もし仮に汝らがそうしたとしても、〔…〕汝らの信仰告白（Confession）に好意を〔…〕抱いたと汝らが夢想しているところの〔…〕ギリシア人たちは、これらの〔日本の〕王と諸侯に尻込みして身を隠してしまう（verkriechen）かもしれない」<sup>(34)</sup>。

シェーラーは、これに続く箇所でも、「御足への接吻（Füßküssung）」の意義に言及し、この問題に関して彼の他のパンフレットの記述を参照するよう、読者に要請している<sup>(35)</sup>。そのパンフレットの当該箇所では、シェーラーは、「教皇の足への接吻」を「教皇の神格化（教皇に対する偶像崇拜）の表れ」と見なすルター派の批判に應えるかたちで、「御足への接吻」という行為の宗教的正当性を弁じている<sup>(36)</sup>。こうした記述から明らかなように、シェーラーにとって重要な意味を持っていたのは、「教皇の御足への接吻」と「教皇への服従」を「教皇の神格化の表れ」として批判するルター派の主張を片隅に追いやるように、「日本の王と諸侯」が、その書状を通じて、「御足への接吻」という象徴的行為による「教皇への全面的な服従の姿勢」を「全世界」に示したことであった。これと同様の主張は、シェーラーの『潔白の保護』でも繰り返されている。そこでシェーラーは「日本（Iapon）、ペルー（Peru）、インド（India）の〔…〕偶像崇拝的かつ異教的な王と諸侯が〔…〕カトリックの宗教に〔信仰を〕告白し志願している」と述べた後に、日本からの使節派遣の重要な目的がローマ教皇への「服従と恭順の証明」にあったことを強調しているのである<sup>(37)</sup>。

さらにシェーラーは、『穏やかなる返答』に付された《日本の3人の大名の書状のドイツ語翻訳文》の欄外注で、1585年にドイツの自由帝国都市アウクスブルクで出版されたパンフレット——同年ローマで刊行された《日本からの使節》に関するローマ教皇庁の公式の記録（『日本の諸王の使節のために教皇グレゴリウス13世聖下によってローマにおいて公開で開催された枢機卿会議の記録』〔以下『枢機卿会議の記録』と略〕）をラテン語からドイツ語に翻訳したもの<sup>(38)</sup>——に言及している。このアウクスブルクのパンフレットに

も日本の3大名の書状のドイツ語翻訳文（シェーラーの『穏やかなる返答』に付された翻訳文とは異なる翻訳文）が収録されているが、シェーラーは、このアウクスブルクのパンフレットに収録された3大名の書状のドイツ語翻訳文の訳者がルター派信徒であることを指摘したうえで、「[日本の]王たちが《教皇》を《神》と見なしている」との誤解を招きかねない訳文がその翻訳に含まれている、と述べ、読者に警戒を促している<sup>(39)</sup>。アウクスブルクで刊行された、このパンフレットは、「カトリックの検閲と審査」を経ることなく出版されたと推定される。シェーラーは、その事実を示唆するとともに、日本の3大名の「教皇への服従の表明」が「教皇の神格化・偶像化」というルター派の批判の構図に絡め取られることのないよう、予防線を張ったのである。

シェーラーの議論の狙いを理解するうえで、もう一つ重要なのは、彼の議論のなかで、「《御足への接吻》を介した日本の王・諸侯とローマ教皇との間の紐帯の強固さ」が、「《アウクスブルク信仰告白》に基づくルター派の宗派（教派）形成の脆弱さ」と対比させられていることである。『穏やかなる返答』のなかの先述の引用箇所の上に前の部分で、シェーラーは、ルター派神学者たちがコンスタンティノーブル総主教に送付した『アウクスブルク信仰告白』のギリシア語訳テキストについて論及している。そしてシェーラーは、このギリシア語訳テキストのなかに、1530年にルター派諸侯・諸都市の署名を付して神聖ローマ皇帝カール5世に提出された『アウクスブルク信仰告白』の記述と一致せず、また1577年に作成され1580年に公刊されたルター派の新たな信仰簡条（『和協信条（Konkordienformel, Formula concordiae）』）の記述とも一致しない、異なる内容のテキストが含まれていることを指摘し、総主教に送

付されたテキストは「[アウクスブルク信仰告白]の草稿とも、第1版とも、第2版とも、第3版とも、いや […] いかなる版とも一致しない」「不正な偽りのアウクスブルク信仰告白」であった<sup>(40)</sup>、と指弾している。

このシェーラーの批判は、十六世紀半ば以降、ドイツのカトリック神学者たちが繰り返し唱えてきた《ルター派への批判》の論理を踏襲するものであった。1555年のアウクスブルク宗教平和（宗教和議）によって「アウクスブルク信仰告白に与する帝国等族（帝国議会への参加資格を持つ選帝侯・諸侯）」にカトリックと同等の帝国法上の権利が保障された後、神聖ローマ帝国のルター派諸侯・神学者の間では、「アウクスブルク信仰告白のいかなる版（テキスト）を正式の版（テキスト）と見なすか」をめぐる対立が生じ、ルター派勢力どうしの間の神学的・政治的な紛争が繰り返された<sup>(41)</sup>。そしてカトリック神学者たちは、「信仰告白の解釈」をめぐる内部分裂を繰り返す、このようなルター派の有り様を、1550年代後半から様々な情報媒体を用いて批判し続けた<sup>(42)</sup>。シェーラーの議論は、そうした批判の潮流に棹さしているのである。

さらにシェーラーは、「一つの信仰告白（einer Confession）のもとに足を留めることができない」ルター派の有り様を、「一つの場（einem Ort）に留まることができずにあちこちらを彷徨い続ける […] カイン」<sup>(43)</sup>に擬えて、それを「神の罰の表れ」と解釈し<sup>(44)</sup>、「ローマ」という明確な中心を持つカトリック教会の有り様と対比させている。そしてシェーラーは、この議論に説得力を与えるために、日本の3人の大名の書状をドイツ語に翻訳する際、そこに一つの《加工》を施した。『枢機卿会議の記録』に収められている日本の3大名の書状のラテン語翻訳文には「ロー



マ」という地名が一言も記されていないが、シェーラーはその書状をドイツ語に翻訳する際に、有馬晴信の書状のラテン語翻訳文に記されていた「貴地に至る (isthuc venire)」という言葉に「ローマに至る (gen Rom kommen)」という言葉に意識した<sup>(45)</sup>。もっとも、この訳語の選択がシェーラー個人の判断によるものであったかどうかはわからない。パンフレットの記述の修正権は、インゴルシュタット大学の検閲官が有していたからである。しかしそれが誰の意図によるものであったにせよ、ドイツ語訳に際しての「ローマ」という言葉の追加は、日本の3大名の書状がドイツ語に翻訳される過程で《ローマ教皇の権威の明確化を目指す対抗宗教改革の趨勢》<sup>(46)</sup>に一層強固に組み込まれていったことを如実に物語っているのである。

### (5) 「異教徒の王たちの改宗」についての聖書の預言と「日本の王たちによる使節派遣」

#### ——オーストリアでのシェーラーの説教における「改宗の促し」の論理

既に(2)で述べたように、シェーラーの『改宗の諸理由』は、オーストリア大公領のニーダーエスターライヒ（下オーストリア）のハウセク貴族領において——同領主の管轄下にあった市場町グレストンの聖ニコラウス教会で——1586年春にシェーラーが行った《説教》の内容を《印刷物》に編集し直したものである。ハウセク貴族領でシェーラーが説教を行い、それが印刷されるに至った歴史的背景、そして説教の全体の構成と「日本からの使節」に関する言及との関わり、さらにその説教及び印刷物が想定している受容層、これらの問題を詳らかにするためには複雑な分析が必要となるが、

紙幅の制約ゆえに、ここでは幾つかの重要な論点を指摘するに留めたい。

『改宗の諸理由』に収録された説教は、ハウセク貴族領の領民に「ルター派からカトリックへの改宗」を促すために行われたものだが、この「改宗の促し」がどのような性格のものであったかを理解するためには、この「改宗」の歴史的経緯に目を配る必要がある。

オーストリア大公領の支配者であるハプスブルク家の君主は《ドイツのカトリック勢力のリーダー》であったが、1564年～1576年に大公領の君主の地位にあったマクシミリアン2世は、大公領内のニーダーエスターライヒの貴族（ラントヘレン）と騎士に『宗教容認状』（1568年）及び『保障状』（1571年）を付与し、貴族と騎士が彼らの領地で彼らの領民とともに『アウクスブルク信仰告白』に則った礼拝（ルター派の礼拝）を行う権利を認めた<sup>(47)</sup>。シェーラーが説教を行ったハウセク貴族領は、1547年頃にシュテファン・フォン・ツィンツェンドルフの領地（ヘルシャフト）となったが<sup>(48)</sup>、1560年頃にはツィンツェンドルフ家の領主はルター派に与していたと推測される<sup>(49)</sup>。それゆえ、1571年以降は、前述の『保障状』の規定によって、ハウセクの領民も、公式にルター派の礼拝に参加することができるようになった。ところが、シュテファンの女孫エリーザベトが、1580年代半ばにシェーンキルヒェン家のハンス・ヴィルヘルムと結婚した後、ハウセクの領有権は、夫であるハンス・ヴィルヘルム・フォン・シェーンキルヒェンの手に移譲された<sup>(50)</sup>。彼は、それまでルター派信徒であったが、ハウセクの領主となる直前にカトリックに改宗した。その結果として、シェーンキルヒェンがハウセクの領主の地位に就くと同時に、ハウセクの領民もまた、その「改宗」に付き従うことを余儀なくされ

た。『改宗の諸理由』に収録されたシェーラーの説教は、そうした状況の下で、ハウセク領民に「カトリックへの改宗」を受け入れさせるために行われたものである<sup>(51)</sup>。シェーラーは、『改宗の諸理由』の序文のなかで、ハウセクにおける「カトリック信仰の受け入れ」が速やかに実現したことを強調しているが<sup>(52)</sup>、ハウセクの領民には、「カトリック信仰の受け入れ」以外の選択肢は残されていなかったことになる。

このような「歴史的経緯」とともに、シェーラーの説教のなかでの「日本からの使節」の位置づけについて考察する際、考慮に入れなければならないのは、「説教」という情報伝達手段の特徴である。

十六世紀のドイツの識字率は極めて低く、ラテン語でなくドイツ語で記された印刷物であっても、それを自分で読むことのできる人々の割合は限られていた。そのために、ルターを初めとするドイツの宗教改革者たちは、「印刷物」による情報伝達を補う手段として、「説教」のような口頭での情報伝達の手法を重視した<sup>(53)</sup>。そして非識字層を受容層として想定した「説教」では、識字層・学識層を主な読者層とする「印刷媒体」に比して、より民衆的・通俗的な題材と語り口が用いられることが多かった。それと同種の民衆的・通俗的な説教の手法が、『改宗の諸理由』に収められたシェーラーの説教にも見て取れるのである。従って、そこに含まれる「日本からの使節についての言及」に分析を加える場合には、それらの言及と「民衆的な説教の手法」との関わりにも目を向ける必要がある。

『改宗の諸理由』では、ハウセク領民がルター派からカトリックに改宗する「12の理由」が、「12の説教」を通じて物語られている。「日本からの使節」に関する言及は「第2の説教」でなされてい

るが、その説教の冒頭で、シェーラーは、「聖書（Die heilige Schrifft）は、[…] 異教徒の王たち（den Königen der Heyden）について、彼ら[その王たち]が[…] 真の信仰を受け入れる[…] であろうことを証言している」<sup>(54)</sup>と語り出す。そしてシェーラーは、それまでの1500年の歴史を通じて、もっとも多くの「異教徒の皇帝・王・諸侯・領主たち」のキリスト教への改宗がローマ・カトリック教会のもとでなされてきたことを指摘したのちに、「異教徒の王たちの改宗（Bekehrung）[…] についての聖書の[…] 預言（Biblische... Propheceyungen）が[…] ルター派の信仰のもとで成就したことがあっただろうか？」<sup>(55)</sup>と聴衆に問いかける。そして、「今日においても、新世界及び新たに発見された異教的な島々（Heydnischen Jnseln）[…] の強大な王と諸侯が[…] ローマ教会に所属する司祭たちから洗礼を施され、[…] 昨1585年には、4人の王侯使節が、[…] 日本島（Jnsel Jappon）の[…] 諸王国から[…] 陸路と海路による3年に亘る旅を経てローマへと到来し、豊後の王フランキスクス、有馬の王プロタジウス、大村の公爵バルトロメウス[…] の名においてローマ教会の教皇座に[…] 服従を示した」<sup>(56)</sup>と述べたうえで、シェーラーは、次のような問いを発する。「異教徒の王や諸侯が、遠方から[…] ヴィッテンベルクに、ライプツィヒに、チュービンゲンに、またあるいはいずれかのルター派の都市（Lutherische Stadt）[…] に到来し、そこで[…] 和協信条書やアウクスブルク信仰告白への記名を希望する、などということが、これまでにあっただろうか？」<sup>(57)</sup>と。つまり、シェーラーの説教の枠組みのなかで、「日本の王たちのローマ教皇への使節派遣」は「異教徒の王のキリスト教への改宗」についての聖書の預言の成就と解釈され、その解釈が「ルター派に対するカトリッ

クの優位性」の根拠として、さらにまた「ハウセク領民のルター派からカトリックへの改宗」の理由として示されている。このように「聖書の記述」を同時代の出来事と結びつけて「同時代の出来事についての預言」として解釈する手法は、十六世紀の民衆向けの情報媒体でしばしば用いられた「語りの手法」であるが、ここではそうした手法に基づいて、「日本からの使節の来欧」という出来事が「改宗の促しのための説教の題材」に組み込まれているのである。

本稿では、1586年に南ドイツで刊行された印刷物（及びそこに収録されたオーストリアでの説教の記録）に含まれる「天正遣欧使節」についての言及を手がかりに、「日本の3人の大名のローマ教皇宛の書状」が「ルター派の宗派形成の脆弱さ」を論難するためのカトリックの対抗宗教改革的な議論の構図に組み込まれてゆく過程、そしてさらに、ルター派領民をカトリックに改宗させるための説教のなかで「日本からの使節の来欧」という出来事が「異教徒の王の改宗についての聖書の預言」の解釈に取り入れられてゆく過程を明らかにしてきた。紙幅の制約ゆえに、こうしたカトリック神学者の議論にルター派の側がどのように応答したのか、あるいは、日本以外の非ヨーロッパ地域での宣教に関する情報がドイツでどのように受容されたのか、といった問題には言及できなかったが、それらについては稿を改めて論ずることとしたい。

（補記）引用文中の[ ]の中に記された語句は、本稿著者による補足を表し、[...]は、省略箇所を表している。引用文中に( )で挿入した原文表記や注の史料表題表記では、史料のなかで用いられている近世ドイツ語及びラテン語の綴りをそのまま使用している。但し、近世ドイツ語に見られる特殊なウムラウト表記は、現代ドイツ語のウムラウト表記に改めた。注記中のVD 16の書誌データは、『ドイツ語圏で出版された16

世紀の印刷物の目録』（*Verzeichnis der im deutschen Sprachbereich erschienenen Drucke des XVI. Jahrhunderts*, Stuttgart, 1983-2000）と、この目録のデータにもとづいて増補・編纂・公開されているバイエルン図書館連盟のオンライン・データベース〈[http://www.gateway-bayern.de/index\\_vd16.html](http://www.gateway-bayern.de/index_vd16.html)〉（2016年9月20日時点）に依拠している。また、注で用いた略記は以下の通り。R. Streit, *Bibliotheca Missio-num*, Bd.4, Aachen, 1928（=BM IV）; *Bibliographischer ALT-JAPAN-KATALOG 1542-1853*, Kyoto, 1940（=AJK）。なお、注記中の聖書の参照箇所は、『聖書・新共同訳』日本聖書協会、1996年に拠っている。本稿は、科学研究費補助金（基盤研究C・課題番号21520759）の助成を受けた研究成果の一部である。

## 注

- （1）本稿では、「ドイツ」という名称を、原則として「16世紀の神聖ローマ帝国の支配地域」を指す言葉として用いており、そこには現代のチェコやオーストリアの領土も含まれる。
- （2）B. Duhr, *Geschichte der Jesuiten in den Ländern deutscher Zunge*, Bd.1, Freiburg (Breisgau), 1907, S. 477; R. Po-Chia Hsia, Mission und Konfessionalisierung in Übersee, in: W. Reinhard/ H. Schilling (Hg.), *Die Katholische Konfessionalisierung*, Gütersloh, 1995, S. 158-165, bes. S. 161. ドイツでのカトリック改革と対抗宗教改革の展開については、G. Maron, Art. Katholische Reform und Gegenreformation, in: *Theologische Realenzyklopädie*, Bd.18, Berlin, 1989, S. 45-72 も参照せよ。
- （3）Vgl. C. von Collani, Medien in der frühen Neuzeit, in: K. Koschorke (Hg.), *Etappen der Globalisierung in christentumsgeschichtlicher Perspektive*, Wiesbaden, 2012, S. 105-133, bes. S. 109-112.
- （4）Index librorum prohibitorum, cum Regulis (1564), in: F. H. Reusch (Hg.), *Die Indices librorum prohibitorum des sechzehnten Jahrhunderts*, Tübingen, 1886, S. 243-281. Vgl. J. Hemels, Preszensur im Reformationszeitalter (1475-1648), in: H.-D. Fischer (Hg.), *Deutsche Kommunikationskontrolle des 15. bis 20. Jahrhunderts*, München, 1982, S. 13-35, bes. S. 20-21.
- （5）D. Breuer, *Oberdeutsche Literatur 1565-1650*, München, 1979, S. 94-103; ders., *Geschichte der literarischen Zensur in Deutschland*, Heidel-

- berg, 1982, S. 39-42 (浜本隆志／宇佐美幸彦／芳原政弘訳『ドイツの文芸検閲史』関西大学出版部, 1997 年, 31-35 頁); 小野善彦「十六世紀後半のバイエルンにおける反宗教改革」(佐藤伊久男編『ヨーロッパにおける統合的諸権力の構造と展開』創文社, 1994 年, 677-752 頁に所収), 712-715 頁, 723-725 頁。
- (6) A. Boscaro, *Sixteenth Century European Printed Works on the First Japanese Mission to Europe*, Leiden, 1973. また, D. F. Lach, *Asia in the Making of Europe, Vol. 1*, Chicago, 1965, pp. 701-705; アドリアーナ・ボスカロ, 金井圓訳「天正遣欧使節に関する新史料」(『日本歴史』第 275 号 [1971 年], 62-75 頁に所収), 松田毅一『史譚天正遣欧使節』講談社, 1977 年, 17 頁, 若桑みどり『クアトロ・ラガッツィ』集英社, 2003 年, 323 頁も参照のこと。
- (7) シェーラーの生涯については, Art. Scherer, Georg, in: *Allgemeine Deutsche Biographie, Bd. 31*, Leipzig, 1890, S. 102-103; Duhr, a. a. O., S. 798-820; R. Pichl, Art. Scherer, Georg, in: *Neue Deutsche Biographie, Bd. 22*, Berlin, 2005, S. 689-690 を参照のこと。
- (8) G. Scherer, *Georgij Scherers Geline Antwort/ auff die zornige Schmachschriff/ so von Württembergischen... Theologen... newlichen außgesprengt worden*, Ingolstadt, 1586 (VD 16 S 2707)。
- (9) G. Scherer, *Rettung der Jesuiter Vnschuld wider... Lucam Osiander*, Ingolstadt, 1586 (VD 16 S 2734)。
- (10) G. Scherer, *Vrsachen Der Bekehrung der Herrschafft Ober vñ Nider Haußbeck im... Ertzhertzogthumb Oesterreich vnder der Enß/ so vom Lutherthumb/ darinnen sie hievor vber 26. Jar... gesteckt/ widerumb zum... Catholischen Glauben/ die... Fasten vnd Osterzeit dises jetzt schwebenden 1586. Jars... gebracht worden. Gepredigt durch Georgium Scherer Societatis Iesv Theologum, zů Grösten/ in obgedachter Herrschafft Pfarrkirchen/ vber das Euangelium am Sontag Sexagesimae*, Ingolstadt, 1586 (VD 16 S 2744)。
- (11) これらの論争については, H. Traitler, *Konfession und Politik*, Frankfurt am Main/ New York, 1989, S. 111-130; K. Bremer, *Religionsstreitigkeiten*, Tübingen, 2005, S. 46-47, 134-173 を参照せよ。
- (12) G. Mecenseffy, *Geschichte des Protestantismus in Österreich*, Graz/ Köln, 1956, S. 82-106; E. Zöllner, *Geschichte Österreichs*, Wien, 1961, S. 199-201 (リンツビヒラ裕美訳『オーストリア史』彩流社, 2000 年, 256-258 頁)。
- (13) E. -O. Mader, *Conversion Concepts in Early Modern Germany*, in: D. M. Luebke/ J. Poley/ D. C. Ryan/ D. W. Sabean (ed.), *Conversion and the Politics of Religion in Early Modern Germany*, New York/ Oxford, 2012, pp. 31-48 の p. 38 で, シェーラー『潔白の保護』の「日本の使節への言及箇所」が引用されているが, 「シェーラーの議論のなかでの同使節の位置づけ」についての分析はなされていない。
- (14) Duhr, a. a. O., S. 798-802; Traitler, a. a. O., S. 71-72。
- (15) Duhr, a. a. O., S. 800。
- (16) 蝶野立彦「宗教改革期のドイツにおける読書・コミュニケーション・公共性」(松塚俊三／八鍬友広編『識字と読書』昭和堂, 2010 年, 19-45 頁に所収), 35-37 頁を参照。
- (17) Vgl. Bremer, a. a. O., S. 44-45。
- (18) VD 16 の書誌情報によれば, 1585 年～1589 年に刊行されたシェーラーの 32 点のパンフレット(再版を含む)のうちの 31 点はドイツ語印刷物であり, 1 点のみ (VD 16 S 2728) がイタリア語印刷物である。Vgl. Bremer, a. a. O., S. 47, 140-141。
- (19) 1585 年～1589 年刊行のシェーラーの 32 点のパンフレットのうち, 18 点がインゴルシュタットで出版されており, ヴィーンで出版されたものは 4 点のみ (VD 16 S 2728, S 2720, S 2732, S 2733) である。
- (20) Index librorum, S. 249. Vgl. F. H. Reusch, *Der Index der verbotenen Bücher*, Bonn, 1883, S. 337-338. 第 6 規則の規定は, 「聖書の民衆語翻訳出版」に関する第 4 規則 (Index librorum, S. 248) に準じている。
- (21) Scherer, *Geline Antwort*, Bl.) (4b. Vgl. Bremer, a. a. O., S. 192。
- (22) Vgl. T. Wiedemann, *Die kirchliche Bücherzensur in der Erzdiözese Wien*, in: *Archiv für österreichische Geschichte*, Bd. 50 (1873), S. 213-520, bes. S. 265-272; Breuer, *Oberdeutsche Literatur*, S. 97。
- (23) H. Neumann, *Staatliche Bücherzensur und-aufsicht in Bayern von der Reformation bis zum Ausgang des 17. Jahrhunderts*, Heidelberg/ Karlsruhe, 1977, S. 29。



- (24) Scherer, a. a. O., Bl.Hh4a (S. 247); ders., *Ret-tung*, Bl.K4a (S. 73); ders., *Vrsachen*, Bl.H4b (S. 58).
- (25) J. Schall, Tübingen und Konstantinopel, in: *Blätter für württembergische Kirchengeschichte*, 7. Jahrgang (1892), S. 33-34, 41-43, 49-52, 57-61, 65-69, 73-75; 森安達也『キリスト教史(Ⅲ) 東方キリスト教』山川出版社, 1978年, 399-403頁。『アウクスブルク信仰告白』のギリシア語版と他の版との関係については, D. Wendebourg, *Reformation und Orthodoxie*, Göttingen, 1986, S. 155-162 を参照のこと。
- (26) *Ibid.*, S. 383-389.
- (27) G. Scherer, *Neue Zeytung aus Constantinopel* ..., Wien, 1583 (VD 16 J 226). Vgl. Traitler, a. a. O., S. 112; Bremer, a. a. O., S. 46-47.
- (28) Scherer, *Gelinde Antwort*, Bl.B2b (S. 12).
- (29) 『穏やかなる返答』の刊行年は1586年だが, 同書の序文に「1585年8月28日」という日付が付されていることから, 同書の執筆は1585年に行われたと推測される。
- (30) Scherer, a. a. O., Bl.B2b-B3a (S. 12-13).
- (31) *Ibid.*, Bl.B3a (S. 13).
- (32) *Ibid.*, Bl.B3b-C2a (S. 14-19). 3大名の書状のラテン語翻訳文については, 本稿の注(38)を参照。
- (33) Scherer, a. a. O., Bl.B3b (S. 14), C1a (S. 17), C1b (S. 18).
- (34) *Ibid.*, Bl.C2a-C2b (S. 19-20).
- (35) *Ibid.*, Bl.C2b (S. 20).
- (36) G. Scherer, *Bericht/ Ob der Papst zu Rom der Antichrist sey* ..., Ingolstadt, 1585 (VD 16 S 2680), Bl.O3a-P1b (S. 97-102).
- (37) Scherer, *Rettung*, Bl.H3a-H3b (S. 55-56). 同箇所については, Mader, *op. cit.*, p. 38 も参照せよ。
- (38) *WArhafftige/ vnd Ewiger Gedechtnuß*..., Augsburg, 1585 (VD 16 A 143). Vgl. BM IV, Nr. 1645; AJK, Nr. 40; Boscaro, *op. cit.*, no. 32. 同パンフレットのもとになったラテン語の『枢機卿会議の記録』は, 以下のタイトルでドイツでも刊行された。*ACTA CONSISTORII PVBLICE EXHIBITI*..., Dillingen, 1585 (VD 16 A 140). Vgl. BM IV, Nr. 1620; AJK, Nr. 34; Boscaro, *op. cit.*, no. 6. 3大名の書状のラテン語翻訳文は, 同『記録』のなかに収録されている。また, 同『記録』の日本語訳が『大日本史料・第11編別巻之一・天正遣歐使節関係史料(1)』東京大学出版会, 1959年, 238-260頁に収められており, 同『記録』のなかの『3大名の書状のラテン語翻訳文』の日本語訳も, 同書, 239-243頁に収められている。この『記録』と3大名の書状については, 松田前掲書, 14頁及び177-178頁, 若桑前掲書, 320-323頁も参照のこと。
- (39) Scherer, *Gelinde Antwort*, Bl.B4b (S. 16); *WArhafftige/ vnd Ewiger Gedechtnuß*..., Bl. B1b.
- (40) Scherer, a. a. O., Bl.B1a-B1b (S. 9-10). Vgl. Wendebourg, a. a. O., S. 157.
- (41) 蝶野立彦「『宗派形成の場』としての帝国議会」(甚野尚志/ 踊共二編『中近世ヨーロッパの宗教と政治』ミネルヴァ書房, 2014年, 209-232頁に所収), 222-227頁, 蝶野立彦『十六世紀ドイツにおける宗教紛争と言論統制』彩流社, 2014年, 357-358頁を参照せよ。
- (42) 蝶野前掲書, 327-334頁を参照のこと。
- (43) 『創世記』4章12節を参照のこと。
- (44) Scherer, a. a. O., Bl.B2a (S. 11).
- (45) *ACTA CONSISTORII*, Bl.A3a (p. 5); Scherer, a. a. O., Bl.C1a (S. 17).
- (46) 「ローマ教皇の権威」に対するドイツの司教たちの懐疑的態度とそれを払拭するための「ローマ教皇首位説の明確化」の試みについて, Maron, a. a. O., S. 49-50, 53, 60-63 を参照のこと。
- (47) J. K. T. von Otto, *Geschichte der Reformation im Erzherzogthum Oesterreich unter Kaiser Maximilian II.*, Wien, 1889, S. 45-47; V. Bibl, Die Organisation des evangelischen Kirchenwesens im Erzherzogthum Österreich u. d. Enns, in: *Archiv für österreichische Geschichte*, Bd. 87 (1899), S. 113-228, bes. S. 125-131. Vgl. Me-censeffy, a. a. O., S. 52-53; W. Ziegler, Nieder- und Oberösterreich, in: A. Schindling/ W. Ziegler (Hg.), *Die Territorien des Reichs im Zeitalter der Reformation und Konfessionalisierung*, Bd. 1, Münster, 1992, S. 119-133, bes. S. 126; 石井大輔「16世紀後半における宗派对立と領邦「エスターライヒ・オブ・デア・エンス」の形成」(『神戸大学史学年報』第20号 [2005年], 39-56頁に所収), 55頁。
- (48) M. A. Becker, *Der Ötscher und sein Gebiet*, Bd. 2, Wien, 1860, S. 89; G. von Pettenegg, *Ludwig und Karl Grafen und Herren von Zinzendorf*, Wien, 1879, S. 15; O. Seefried, *Geschichte des Marktes Gresten in Niederösterreich*, Gresten, 1933, S. 30.
- (49) Scherer, *Vrsachen* の表題の記述と同書の Bl.



- A4b (S. 2) の記述を参照せよ。
- (50) Becker, a. a. O., S. 95–96.
- (51) B. Raupach, *Erläutertes Evangelisches Oesterreich, Oder: Dritte und Letzte Fortsetzung*, Hamburg, 1740, S. 67; T. Wiedemann, *Geschichte der Reformation und Gegenreformation im Lande unter der Enns, Bd. 4*, Prag/ Leipzig, 1884, S. 255; Duhr, a. a. O., S. 802; M. Enzner/ E. Krauß, *Exulanten aus der niederösterreichischen Eisenwurz in Franken*, Nürnberg, 2005, S. 231.
- (52) Scherer, *Vrsachen*, Bl.A2a.
- (53) R. W. Scribner/ C. S. Dixon, *The German Reformation, Second Edition*, New York, 2003, pp. 19–21 (森田安一訳『ドイツ宗教改革』岩波書店, 2009 年, 25–27 頁); 蝶野「宗教改革期のドイツにおける読書・コミュニケーション・公共性」, 25–31 頁。
- (54) Scherer, a. a. O., Bl.C1a (S. 11). この箇所では、『詩編』72 編, 『イザヤ書』60 章, 『イザヤ書』49 章, 『ダニエル書』7 章の記述が根拠として示されている。但し, シェーラーが欄外注に記載している章番号は, Vulgata 聖書で用いられている章番号である。
- (55) Scherer, a. a. O., Bl.C1a–C1b (S. 11–12).
- (56) *Ibid.*, Bl.C1b–C2a (S. 12–13).
- (57) *Ibid.*, Bl.C2a (S. 13).